

ジェイムズ・ジョイスの「小さな雲」

南 谷 覺 正

外国文化第一研究室

A Reading of “A Little Cloud” by James Joyce

Akimasa Minamitani

World Civilizations

Abstract

This essay is an attempt to explicate “A Little Cloud,” the eighth story in James Joyce’s *Dubliners*. The main focus is placed on the analysis of the characters, Little Chandler and Ignatius Gallaher, and their motives, overt and covert, are probed in detail.

『ダブリンの人々』8番目（完成は1906年4月）の作品「小さな雲」（“A Little Cloud”）は、「成
熟期」を構成する4つの作品の最初のものである。1906年10月に Stanislaus に宛てた手紙の中には、
“A page of ‘A Little Cloud’ gives me more pleasure than all my verses.”⁽¹⁾ という言及が見られ、
ジョイス自身がこの作品の出来栄えにかなり満足していた様子が窺える。

*

(1) Little Chandler は、8年前、友人を北埠頭に見送り、前途の幸運を祈った。Gallaher は成功した。それは彼の旅慣れた雰囲気、いい仕立てのツイードの上着、物怖じしない言葉にも見てとれる。彼ほどの才能に恵まれた男はめったにいないだろうし、成功してもそれに毒されず昔のままでいられる男はもっと少ないだろう。肚もすわっている。成功すべくして成功したのだ。ああした友人を持つのは、誰にでも恵まれる幸運ではない。⁽²⁾

(2) Little Chandler の昼食時からの考えは、Gallaher と出会ったこと、Gallaher が一杯やろうと誘ってくれたこと、そして Gallaher が住んでいる大都会ロンドンについて思い巡らされていた。彼は Little Chandler と呼ばれていた。背丈は並より少し低いだけなのだが、全体的に何となく小男という印象を与えた。彼の手は白くて小さく、体つきは華奢で、声はか細く、物腰は繊細であった。その絹

のようなブロンドの髪と口髭には細心の手入れが施され、ハンカチには香水が上品な程度に含ませてあった。彼の爪の半月は完璧な曲線を描き、微笑むと子供のような歯並びが口もとに白く覗いて見えた。

(3) King's Inns の自分の机に向かって座りながら、彼はこの8年という歳月がもたらした大きな変化について想いを巡らせた。窮乏して尾羽打枯らしていた友人が、ロンドンの新聞界で颯爽と活躍するようになった。彼はその退屈な書写の仕事からしばしば目を挙げ、窓の外を見つめた。晩秋の夕光が、中庭の芝生と歩道に射していた。その光は、優しい金粉のようなきらめきを、だらしない身なりの乳母たちや、ベンチで居眠りをしているよぼよぼの老人たちの上に投げ掛けていた。光は動いているものすべての上に、遊歩道の砂利の上を叫びながら走り回っている子供たちの上、そして中庭を横切って歩いていく人たちの上に、きらきらと輝いていた。彼はこの光景を見つめ、人生を想い、そして(彼が人生を想う時にはいつもそうなるのだが)、悲しみを感じた。穏やかな憂愁が彼の心を領した。彼は、運命に逆らって抗うことがどんなに虚しいかを感じた。それは、幾時代もの経験の堆積から伝えられてきた知恵の重みとでも言うべきものであった。

(4) 彼は家の書棚に並んでいる詩集を思い出した。彼はそれらを独身の時に買いためたのであった。幾晩ともなく、玄関ホールの脇の彼の小部屋で、彼はその中の1冊を取りだし、何かを妻に読んで聞かせたい誘惑に駆られた。しかしいつも含羞みが彼を押し留めた。だから詩集は書棚に載ったままになっている。ときどき彼は1人で詩行を繰り返し口ずさみ、それで自分を慰めた。

(5) 勤務の終りの時刻が来ると、彼は立ち上がり、彼の机と同僚の事務員たちに律義に辞去を告げた。そして King's Inns の封建時代様式のアーチの下から、その小綺麗に身繕いした慎ましい姿を現し、Henrietta Street を足早に歩いていった。金色の夕光は衰えつつあり、空気は冷たくなってきていた。汚らしい子供たちの群れがその通り一帯に住んでいた。彼らは通りに突っ立っていたり、走ったり、大きく開け放たれたドアの前の階段を這いあがったり、敷居のところに蹲っていたりした。Little Chandler は、彼らに対し一顧だに与えなかった。そしてこれら全ての害虫のような生きものたちの間を縫うようにして、ありし日にはダブリンの旧貴族たちが浮かれ騒ぎ、今は寂れて幽霊屋敷のようになった建物の陰の下を、小器用に歩いていった。過去のどんな記憶も彼に触れることはない。彼の心は、現在の喜びで満たされていた。

(6) 彼は Corless's に行ったことはなかったけれども、その高い評判は夙^{つと}に知っていた。劇場が退けたあとに、観客たちはそこに入ってオイスターを食べ、リキュールを飲むのであった。そのウェイターたちは、フランス語やドイツ語を話せるとも聞いていた。夜、そこを足早に通りすぎながら、彼は店の前に馬車が停められ、豪華な衣装に身を包んだ婦人たちが、伊達男にエスコートされながら馬車を降り、店の中へ急ぎ足に入っていくのを見たことがある。彼女たちは、衣擦れの音が高く鳴る衣装を着、多くがショールの類いを羽織り、粧し込んで、地面に足が触れると、はっと驚くアタランタさながらに⁽³⁾、衣装の裾を持ち上げるのであった。Little Chandler はそうした時も、顔をそちらのほうに向けたらずに通りすぎていった。昼間でも彼は通りを足早に歩くのが常だった。何かの拍子で

夜に街中にいたりするときには、彼は通りを不安そうに、そして興奮して急いだ。しかし時々、彼の方から恐怖に接近していくこともあり、最も暗く最も狭い路地に入っていったりした。そうした時彼は、大胆に前に向かって歩いた。脚元に静寂が広がると彼の心は掻き乱れ、押し黙ってうろついている影に出くわすと心がさざめき立った。そして時おり、低い密やかな笑い声が響いてくると、彼は木の葉のように打ち震えるのだった。

(7) Little Chandler は右に曲がり、Capel Street の方向に足を向けた。ロンドン新聞界の Ignatius Gallaher! 8年前誰がこのことを想像できただろう? それでも今過去を振りかえってみると、Little Chandler は、彼の友人の中に、将来の偉大さを約束する兆候を思い出すことができた。まわりの連中は、Ignatius Gallaher は素行に問題があると言っていた。確かに彼は当時、札つきの連中とつき合っていて、飲みたい放題に飲み暮らして、あらゆる方面に借金をつくり、最後には後ろ暗いような事件に巻きこまれてしまった。何か金銭上のトラブルだったようで、少なくとも、彼がダブリンを逃げ出したのはそのためだという噂も耳にした。しかし彼に才能があったことは誰も否定しなかった。Ignatius Gallaher には、ある... 思わず唸らされてしまうようなところがあった。金に窮し、にっちもさっちもいなくなったような時でも、彼は大胆不敵な面構えを崩さなかった。Little Chandler は、Ignatius Gallaher が、金策に困り果てた折りの1つで吐いた言葉を思い出した。(そしてその思い出は、彼の頬を誇りで紅潮させた。)

——ハーフ・タイムだ、諸君! と Ignatius Gallaher は快活に言い放った。沈潜の時にしよう。

ひどい男と言われてはいても、あれが Ignatius Gallaher の面目だ。まったく、どうしたって彼を天晴れ見事な男だと認めないわけにはいかないのだ。

(8) Little Chandler は歩調を速めた。彼は生まれて初めて、通り過ぎる人間に対して優越を感じることができた。彼の魂は生まれて初めて、Capel Street の退屈な野暮ったさに堪え難いものを感じた。間違いないことだ。もし成功したいのだったら、こんなところは出ていかなければ駄目だ。ダブリンでは何もできはしない。彼は Grattan Bridge を渡るとき、川下のほうを見やり、そこに並んでいる貧しい、いじけた家並を憐れみの目で眺めた。それらの家は、川岸に寄り集まっている浮浪者の一群を思わせた——古い上着に、土埃と煤をこびりつかせ、一面に広がる夕景に呆然とした表情を浮かべ、最初の冷たい夜気が忍び寄ってくると、腰を上げ、身を震わせながら、どこへともなく姿を消していく浮浪者たち。彼はこうした感興をうまく詩に出来ないものかと考えた。ひょっとしたら Gallaher がどこかのロンドンの新聞に載せるよう口をきいてくれるかもしれない。自分には何か独自のものが書けるだろうか? 何を表現したいのかははっきりとはわからなかったが、詩的な瞬間が彼に触れたという感覚が、彼の中に、生まれたての赤ん坊のような希望を生んだ。彼は大胆に歩いていった。

(9) 1歩進むごとにロンドンが近づき、彼自身のくすんだ非芸術的な生活が遠ざかっていった。彼の心の地平線に、1つの光が瞬き始めた。彼はそんな年をとっているわけではない。まだ32歳だ。彼の気質は今ちょうど成熟の時を迎えていると言えるかもしれない。詩で表現してみたいと思う多くの気分や印象があった。彼はそれらを自分の内部に感じた。彼は彼の魂が、詩人の魂といえるかどうか

検分してみようとした。憂愁が彼の気質の主調になっているようだった。しかしそれは、信仰と諦念と、そして素朴な喜びへの度重なる回帰によって和らげられている憂愁であった。もし彼がそれに表現を与え、詩集にまとめることができれば、人々は耳を傾けるかもしれない。大いなる人気を博するということはないだろう。それは分かっている。彼の詩が大衆にうけることはないだろう、しかし同種の魂を持った少数の人間には訴えかけるものがあるかもしれない。イギリス人の批評家たちは、彼の憂愁を湛えた詩調のゆえに、彼をケルト派の1人として位置づけるかもしれない。彼の詩には様々な古典からの暗喩も鏤められるだろう。Little Chandler は、彼の詩集について書かれるであろう書評の文句を考え始めた。*Chandler* 氏は、自然で優美な詩の才能に恵まれている...もの思わしげな悲しみがこれらの詩に瀰漫している...ケルトの調べ。彼は自分の名前がもっとアイルランド風でなかったのを残念に思った。母方の名を挿入すればよくなるかもしれない。Thomas Malone Chandler、いや、T. Malone Chandler のほうがいいか。Gallagher にそのことについて話してみよう。

(10) 彼は夢想到熱中するあまり、入るべき路地を通りすぎてしまい、引き返さなければならなかった。Corless's の近くに來ると、なりを静めていた動悸が再び戻ってきた。ドアの前でしばし逡巡したのち、意を決して彼はドアを開け、中に入った。

(11) 店の照明と喧騒に彼はしばらく戸口で立ち止まった。あたりを見回したが、視界は赤や緑のワイングラスの煌めきで混乱した。店の中は人であふれ、客たちは彼を物珍しげに見つめているように思われた。彼は視線を（何か重要事でもあるように眉を^{しか}顰めながら）左右にすばやく走らせた。しかし視界が少し晴れてみると、別に誰も彼の方を見てはいはしなかった。Ignatius Gallagher が、脚を大きく開き、背をカウンターにもたせ掛けながらこちらを向いて立っていた。

(12) ——やあトミー、いよいよのお出まじだな。さあ何にする、え、何を飲む？俺はウィスキーだ。こっちのウィスキーのほうが向こうのやつよりもずっといけるね。ソーダかい？それともリチア？ミネラル・ウォーターなしかい？俺も同じだ。香りを損ねちまうからな...おい給仕さん、モルトのハーフを2杯だ...いやあ、ところでどうだい、元気だったかい。まあ、お互い歳をとるの速いことときたらどうだい！俺も老けたかい、どこか？——え？てっぺんは少し白く薄くなってきたさ——何だつて？

(13) Ignatius Gallagher は帽子を脱いで、その大きな、短く刈った頭を見せた。彼の剃りあげた顔はぼつりとして青白く、目は青みがかったスレート色で、それが不健康な顔色を少し救い、鮮やかなオレンジ色のネクタイの上に地味に輝いていた。こうした競合する配色の中に、しまりも血色も悪い唇が、左右に長くのびていた。彼は頭をかがめて、2本の気遣わしげな指で頭頂部の髪が薄くなった部分を撫でてみせた。Little Chandler は、否定の印に頭を横に振った。Ignatius Gallagher は帽子を再びかぶった。

(14) ——すっかりやられちまうね、と彼は言った。記者生活ってやつさ。ネタを探して東奔西走、ネタにありつけないことも珍しくないし、おまけにいつも違う話が飛び込んでくる。だからこの数日だけは、校正刷りも植字工も糞っ食らえって訳さ。いや、帰って来れてこんなに嬉しいことはないな。

ちょっとした休暇は健康にも大事だ。懐かしき泥んこダブリンに上陸して以来、身体の調子もすこぶる上乘さ... さあトミー、割るかい？じゃ注ぐぜ、頃合で声を掛けてくれ。

(15) Little Chandler は、彼のウィスキーがずいぶん薄まるまで待った。

——わかってねえなあ、と Ignatius Gallaher は言った。俺は生^までいくぜ。

——僕は普段ほとんど飲まないんだ、と Little Chandler は慎ましく言った。昔なじみの誰かと会ったりすると半杯かそこらは飲むけどね、それだけだよ。

——さてさて、と Ignatius Gallaher は陽気に言った。さあ、われわれと、懐かしき昔と、昔なじみに乾杯だ。

彼らはグラスを触れ合わせ、乾杯の杯から飲んだ。

(16) ——今日、昔の連中に何人か会ったがね、と Ignatius Gallaher は言った。O'Hara はちょっとシケてたな。奴さん、何してるんだい？

——何も、と Little Chandler は言った。すっかり身をもち崩してしまってね。

——Hogan はいい職にありついたらって？

——あゝ、農地改革委員会にいるよ。

——ロンドンで一晩奴さんに会ったが、羽振りがよさそうだったな... O'Hara は気の毒なことだな、酒でかい？

——いろいろとね、と Little Chandler は短く言った。

Ignatius Gallaher は笑った。

(17) ——トミー、お前さんはちっとも変わってないな。昔、日曜の朝に、俺が舌に白い苔を生やしてキリキリ痛む頭をかかえてると、俺に説教したきまじめなお前さんそのままじゃあないか。ちっとは世間も見ろもんだぜ。どこにも出かけたりしないのかい？

——マン島なら1度行ったことがあるよ、と Little Chandler は短く言った。

Ignatius Gallaher は笑った。

——マン島かい！ロンドンかパリにでも行ってみなよ、特にパリだな。お前さんの目を開いてくれること請け合いだぜ。

(18) ——パリに行ったことがあるの？

——自分で言うのも何だが、ちっとばかしな。

——パリはよく言われるけど本当に美しい街なの？と Little Chandler は聞いた。

Ignatius Gallaher がぐいと酒をあおる間、彼はちびりとグラスを舐めた。

——美しいかって？Ignatius Gallaher は、その言葉と酒を味わうように間を取った。美しいというほどでもないさ。もちろん美しいは美しいんだが... 肝心なのはパリの活気だ。あゝ、パリのような街は2つとはないな。その華やかさ、その賑わい、その興奮...

Little Chandler は彼のウィスキーを飲みおえ、しばらくもたつきながらやっとバーテンダーの視線を捉え、同じものを注文した。

——Moulin Rouge に行ったことがある、と Ignatius Gallaher は、バーテンダーがグラスを片付けた後、話を続けた。それに、ボヘミアンどものたむろするカフェーも全部行って見たがね、いやはや凄いものさ！お前さんのような信心深い人間の行くところじゃないな。

(19) Little Chandler はバーテンダーがグラスを2つ持ってくるまで何も言わなかった。それから、彼は彼の友人のグラスに軽く自分のグラスを触れさせ、最前の乾杯を繰り返した。彼は幾分幻滅を感じ始めていた。Gallaher の言葉のなまりや表現の仕方は彼を喜ばさなかった。彼の言葉には、以前にはなかったどこか下卑たところがあった。しかしそれは、ロンドンでの生活、新聞業界の慌ただしさや競争を考えれば仕方のないことだろう。表面の新しいけばけばしさの底には、昔通りの人間的な魅力がある。それに何ととっても Gallaher は世の中を見、そして生き抜いてきたのだ。Little Chandler は彼の友人を羨望の眼差しで見た。

(20) ——パリでは何もかもが華やいで粋だ。と Ignatius Gallaher は言った。連中は生きていることを楽しむのさ——連中の考えが正しいと思わないかい？もしお前さんが人生をちゃんと楽しめたかったら、パリに行くことだ。それにな、いいかい、連中はアイルランド人に目がないのさ。俺がアイルランド出身だと言うと、連中、俺を食っちまいそうになるのさ。

Little Chandler は、グラスから4、5回、啜るようにして飲んだ。

——パリは、みんなが言ってるように、その... 乱れてるのかい？

Ignatius Gallaher は右腕で、包括的な知識を表すような仕草をしてみせた。

——乱れているといえどどこだってそうさ、と彼は言った。もちろんパリには猥らなとこだってある。ためしに学生のダンス・パーティに行ってみるさ、尻軽女^{尻軽}たちが本性丸出して、そりゃたいへんさ、連中がどんなもんだか知ってるだろう？

——話には聞いたことがあるよ、と Little Chandler は言った。

(21) Ignatius Gallaher はウィスキーをぐっとあおって、首を横に振った。

——いやあ、と彼は言った。誰がどんなことを言おうと構わんがね、パリ^{パリ}女の右に出るものはいないね、格好にしても、それからあっちの情熱にしてもな。

——結局、パリは乱れた街なんだね、と Little Chandler は小心者のしつこさで言った。つまり、ロンドンやダブリンと比べての話だけど。

——ロンドン！と Ignatius Gallaher は言った。パリが6なら、ロンドンは半ダースってとこさ。ホーガンに聞いてみな。奴さんがロンドンに来たとき、少し案内してやったんだ。彼の話を受ければ目が開けるさ... よう、トミー、ウィスキーを酔にしちまう気かい、さあ、空けた、空けた。

——いや、本当にだめなんだよ...

——おいおいよせよ、もう1杯くらい屁でもないさ。何にする？同じやつかい？

——じゃあ... わかったよ。

——おい給^{フランス}仕、同じやつを2杯だ... 煙草は吸うかい、トミー？

(22) Ignatius Gallaher は葉巻入れを取りだした。二人は葉巻に火をつけ、注文した酒が運んでこら

れるまで黙ってそれをふかしていた。

——俺の考えを言おうか、と Ignatius Gallaher は、しばらく隠れていた煙の雲から現われながら言った。いかれた世界さ。乱れているといえば、凄い話を聞いた——というか知ってるんだがね、もの凄く... 乱れた話さ...

(23) Ignatius Gallaher は葉巻をいわくありげにふかし、それから落ち着いた歴史家の口調で、彼の友人のために、外国で盛んに行われている頹廢した情景の幾つかを描いてみせた。多くの首都の悪の華を凝縮して紹介し、その栄冠をベルリンに与えたい様子であった。ある話は伝聞（友人から聞いた話）で、真実のほどは請け合えないが、ある話については自分自身の個人的体験として語った。彼は階級や地位には容赦しなかった。大陸の修道院などの宗教施設で行われている秘事の多くを白日の下にさらけだし、上流階級で流行している行為の幾つかを暴き、最後に、さるイギリス公爵夫人の秘話——これが実話であることは彼自身が知っていた——を微に入り細を穿って物語ってみせた。

Little Chandler は肝を潰した。

(24) ——やれやれ、と Ignatius Gallaher は言った。ここは昔ながらのダブリンで、こういっただけにはからっきし縁がない。

——退屈だろうね、と Little Chandler は言った。そんなにあちこち見てまわったあとじゃ。

——いや、と Ignatius Gallaher は言った。ここに来るのは安らぎになる。それに何と云って、昔なじみの国じゃないか、ある種の感慨は禁じえない、それが人間っていうものさ... ところでお前さんの話を聞こうじゃないか。ホーガンの話じゃ... 華燭の幸に恵まれたとか聞いたぜ。2年前だって？

Little Chandler は顔を赤くして微笑んだ。

——あゝ、と彼は言った。今年の5月でまる1年になるんだ。

——今になってお祝いを言わせてもらうのを許してもらいたい、と Ignatius Gallaher は言った。住所がわからなかったものでね、知っていたら間違いなくそのときお祝いを言っていたのだが。

彼は手を差し伸べ、それを Little Chandler は握った。

——トミー、と Ignatius Gallaher は言った。お前さんたちの幸せを願わせてくれ。幸せとたんまりの金と、それに俺がお前さんを撃つまではお前さんが死なないことをな。これは、真の友人、昔なじみの友人からの願いだ、な？

——あゝ、と Little Chandler は言った。

(25) ——おチビさんは？と Ignatius Gallaher が言った。

Little Chandler は再び顔を赤くした。

——1人、と彼は言った。

——で、どっちだい？

——男の子だよ。

Ignatius Gallaher は友人の背中をポンと大きな音がするほど勢いよく叩いた。

——やったな、と彼は言った。さすがはお前さんだよ、トミー。

Little Chandler は微笑み、当惑してグラスを見つめ、3本の子供っぽい前歯で下唇を噛んだ。

(26) ——君が帰る前に一度、と彼は言った。家に寄ってくれたらいいのだが。家内も君に会えれば喜ぶと思うし、そうすれば音楽でもかけて、それから——

——お招きは本当に嬉しいよ、と Ignatius Gallaher は言った。もっと早く会っていたらよかったんだがな、残念ながら明日の晩にはもう発たねばならんのだ。

——じゃ、よければ今晚でも…

——トミー、悪いがここには別の奴と一緒に来てるんだ。そいつ、若いがなかなかの切れものでな、2人でちょっとしたカード・パーティに行くことになってるんだ。それさえなければ…

——あゝ、それだったら…

——しかしわからんものさ、もうお前さんの家に行けないと決まったわけじゃあない、と Ignatius Gallaher は思慮深そうに言った。こうして道はつけたんだ、来年またダブリンにふいと立寄ることになるかもしれん。そうなれば、ただ喜びの先送りということさ。

——じゃ、と Little Chandler は言った。次回こちらに来たら必ず家に寄ってもらうということで、これは約束だよ。

——あゝ、約束だ、と Ignatius Gallaher は言った。来年こっちに来たら、^{パロール・ドネール}誓ってな。

——じゃその誓いの固めとして、と Little Chandler は言った。もう1杯いこう。

Ignatius Gallaher は大きな金時計を取り出してそれを見た。

——これが最後かい？と彼は言った。というのは、俺はアポ⁽⁴⁾があるんでな。

——いいよ、と Little Chandler は言った。

——よかろう、と Ignatius Gallaher は言った。ではもう一杯、^{デオック・アン・ドルイス}戸口の一杯といこう。こいつはいいゲール語じゃないか。

(27) Little Chandler はウィスキーを注文した。少し前に顔に昇ってきた赤みがそこに定着しつつあった。彼の顔は少しのことでどんな時でも赤くなった。今彼はほてりと興奮を感じていた。3杯のウィスキーが頭に回り、Gallaher の強い葉巻が精神を混乱させていた。彼は繊細で、普段は酒など飲まない人間なのだが、8年ぶりに Gallaher に会い、照明と喧騒に充ちた Corless's の中で、Gallaher と差し向いでその話を聞き、その放浪譚、成功譚を集中的に耳に注ぎこまれた結果、彼の感じやすい心の平衡が崩れてしまった。彼は自分自身の生活と彼の友人の生活の差を切実に感じた。これは不公平というものではないか。Gallaher は生れも教育も彼よりも下だった。彼も機会さえ与えられれば、Gallaher がこれまでできたよりも、これからできるであろうよりも、下卑たジャーナリズムよりも何か高尚でまじなことがきつとできるであろうと感じた。彼の進路を阻んでいるものは一体何なのだろう？彼の不運な小心さではないか！彼は何らかの方法で、自分の男らしさを主張し、自分を証明したかった。彼は Gallaher が彼の家への招待を断った本当の理由を見抜いていた。Gallaher は彼とつき合おうと称して、彼にひけらかしたいだけのだ。故国を訪れると称して、アイルランドに対しいぼってみせているだけなのだ。

(28) バーテンダーが酒を運んできた。Little Chandler は、片方のグラスを友人のほうに押しやり、彼のグラスを大胆に取り上げた。

——わからんものだよ、と彼は言った。来年君が来るときには、僕が Ignatius Gallaher 夫妻の長寿と幸福を願うことになるかもしれない。

Ignatius Gallaher は飲みながら、グラスの縁ごしに表情豊かに片目をつぶってみせた。彼は酒を飲みおえると、舌鼓を高らかに鳴らし、グラスを置いて言った。

——その恐れはまずないと言っていい、と彼は言った。俺はまず羽を伸ばし、人生と世間を少し味わい、それから袋の中に頭を突っ込むのさ——仮に突っ込むとしての話だがな。

——いつか必ずそうするさ、と Little Chandler は平静に言った。

Ignatius Gallaher のオレンジ色のネクタイと青みがかったスレート色の目が、まともに友人のほうに向いた。

——そう思うのかい？と彼は言った。

——いつか必ず袋の中に頭を突っ込むよ、と Little Chandler はきっぱりした調子で言った。他のみんなと同じようにね、もし君がいい女の子を見つけられれば。

彼の口調は少し強くなっていた。彼は本音を漏らしてしまったことを意識した。それでも、顔の赤みこそ増したものの、彼は友人の視線にはたじろがなかった。

Ignatius Gallaher は、彼をしばらく見据え、そして言った。

——もし仮にそうしたことがあったとしても、これはお前さんの最後の1ペニーを掛けてもらっても大丈夫だが、惚れただのどうだのっていうことだけは断じてない。俺が結婚するならそれは金だ。銀行にたんまり貯めている女でなければ、俺の相手にはならない。

Little Chandler は首を横に振った。

(29) ——いいかトミー、と Ignatius Gallaher は激しい口調で言った。俺のまわりがどうなっているか知っているのか？俺が一言言えば、明日にはその女と金がころがりこんでくるんだ。信じないのか？何百人——俺は何を呆けてるんだ？——何千人という金持ちのドイツ女、ユダヤ女が、うぎるほどの金にまみれて、ただもう喜んで... いいか見てるがいい、俺がカードの切り方を間違えないかどうか。俺が事に当たるとき、俺は本気を出すんだ。見ているがいい。

彼はグラスを口につけ、飲み、大きな声で笑った。それから前方を思慮深そうに見つめながら、すこし落ち着いた口調で言った。

——だが俺はあせらずにやるさ。女たちは待たせておけばいい。1人の女に縛りつけられるのはご免だからな。

彼は口許で味わうような仕草をし、それから顔をしかめてみせた。

——どんな女も少し饅^すえてくるものさ、と彼は言った⁽⁶⁾。

.....

(30) Little Chandler は、玄関ホールの脇の彼の部屋に、子供を腕に抱いて坐っていた。節約のため

召使は雇っていなかったが、Annieの妹のMonicaが朝夕1時間ばかり来て手伝ってくれていた。しかしMonicaはもうずっと前に帰ってしまい、今は9時15分前だった。Little Chandlerが帰ったときには、お茶の時間は過ぎてしまっていた。さらに彼は、Bewley'sからコーヒーをAnnieに持って帰るのを忘れてしまった。当然の如く彼女は機嫌が悪く、素っ気ない受け答えをした。彼女は紅茶がなくても別に構わないと言ったが、角の店が閉まる時刻が近づくと、紅茶1/4ポンドと砂糖2ポンドを自分で買ってくることに決めた。彼女は手際よく赤ん坊を彼の腕の中に滑り込ませながら言った。

——起こさないでよ、いい？

(31) 白い磁器製のシェードの小さなランプがテーブルの上に載っていて、その光が、湾曲した角^つ(6)で作られているフレームに囲まれた写真の上に落ちていた。それはAnnieの写真だった。Little Chandlerは、それを眺め、引き締まった薄い唇に視線を留まらせた。彼女は薄青色の夏のブラウスを着ていた。それはある土曜日、彼がプレゼントに彼女に買って来たものだった。値段は10シリング11ペンス。だけどあれを買うのにどんなに悩み抜いたことか！あれを買った日の苦勞ときたら！店の戸口で客がいなくなるまで待ってからカウンターに行き、店員の女の子がブラウスを紙に包んでいる間、緊張を見せないようにやっとの思いで立っていた。おつりのペニー硬貨を取り忘れ、店員に呼び戻され、そして顔が赤くなるのを、包みの紐がきちんとしているか調べるふりをして何とか隠したのだ。ブラウスを家にもって帰るとAnnieは彼にキスし、とても綺麗で素敵だと言った。でも、彼が値段を言うと、彼女はブラウスをテーブルに投げ出し、こんなもので10シリング11ペンス取るのはいつもの詐欺だと言った。最初彼女は店に返品すると言っていたが、身に付けてみると彼女はそれが大いに好きになり、特に袖のつくりが気に入っていた。それで彼にキスをし、彼女のことを思ってくれて嬉しいと言ったのだった。

フム！...

(32) 彼は写真の目を冷ややかに見つめた。すると写真の目も彼を冷ややかに見つめ返した。たしかに綺麗な目だし、顔も綺麗だ。しかし彼はそこに何か卑しいものを見出した。どうしていつも気のない貴婦人めいた顔をしているのだろうか？その目の落ち着きも彼の気に障った。それは彼を寄せつけず、挑むようだった。目の中に何の情熱も、陶酔もなかった。彼はGallaherが話した、金持ちのユダヤ女を想ってみた。黒い東洋の瞳、と彼は思った。ああいった目はどんなに情熱に充ち、艶めかしいうるみを湛えていることだろう！... どうして彼は写真のこの目と結婚してしまったのだろうか？

(33) 彼はこの疑問にはっとして、おずおずと部屋を眺め回した。この家のために分割払いで買った家具にもどこか卑しいところがある。それはAnnieが選んだもので、その家具を見ていると、Annieが連想された。家具にも取り澄ました綺麗さがあった。人生に対する鈍い憤懣が彼の内部に目覚めた。彼はこの小さな家から永久に逃れられないのだろうか？Gallaherのように大胆に生きようとするにはもう遅すぎるのだろうか？彼がロンドンに行ける日はあるのだろうか？家具の分割払いはまだすんでいない。もし詩を書いてそれを出版できさえしたら、それで道が開けるかもしれない。

(34) バイロンの詩集の1巻がテーブルの上に横たわっていた。彼は子供を起こさないようにしながら

ら、それを左手で用心深く開き、最初の詩を読み始めた。

風鎮まれるかそけき夕まぐれ
 樹立を巡る風^{ゼフィロス}精もなき刻限
 我はマーガレットの墓所に戻り来
 愛しの骸^{むくろ}を覆へる土に花を撒きたり

(35) その時子供が目を覚まし、泣き始めた。彼は詩集の頁から目を離し、あやそうとした。しかし赤ん坊は頑としてあやされようとはしなかった。彼は腕の中で赤ん坊を揺らし始めたが、泣き声はいつそうかん高くなった。彼はさらに強く揺すりながら、目は詩の第2聯を追い始めた。

か細き棺^{ひつぎ}にかの土くれ横たわり給ふ
 そはありし日...

(36) 駄目だ、読むことができない。何一つできない。赤ん坊の耳をつんざくような金切り声が彼の鼓膜を貫いた。駄目だ、もう駄目だ。彼は終身刑の囚徒だ。彼の腕は怒りに震えだし、彼は突然赤ん坊の顔にかがみこんで叫んだ。

——止めろ！

(37) 子供は瞬時黙り、それから怖れの発作を引き起して叫び始めた。彼は椅子から跳び上り、腕に子供を抱いてせわしく部屋を行ったり来たりした。赤ん坊は、痛々しそうにしゃくり上げ始め、4、5秒息を止めてはまた張り裂けそうな声を上げた。部屋の薄い壁はその泣き声で反響し、彼は赤ん坊をさすってなだめたが、引撃るようなしゃくり上げは一層激しくなった。彼は赤ん坊の痙攣に震える顔を見て、ひどく心配になった。彼は赤ん坊が7回立て続けにしゃくり上げるのを数えた。彼は赤ん坊を胸に押し当てた。もし死にでもしたら！

(38) ドアが激しく開き、若い女が息を切らせながら走りこんできた。

——どうしたの？どうしたの？彼女は叫んだ

赤ん坊は母親の声を聞きつけ、しゃくりあげの発作を激発させた。

——何でもないんだ、Annie... 何でもない... 急に泣きだしてしまって...

彼女は買い物の包みを床に投げだし、彼から赤ん坊を取りあげた。

——この子に一体何をしたの？え、何なの？彼女は彼の目を睨みつけながら言った。

Little Chandler は、ほんの一瞬彼女の視線を持ちこたえたが、その中に憎悪を見いだすと彼の心は萎えてしまった。彼は吃りはじめた。

——何でもないんだ... こ、この子が急に泣きだして... 何もできない、何もしていないのに... え、何？

(39) 彼女は、彼の言葉には何の注意も払わず、部屋を行ったり来たりしはじめた。腕の中に子供を

抱きしめ囁きかけていた。

——私の可愛い子！私の坊や！怖かったの、え？…ほら！ほらね！…^{ランバボーム}仔羊さん、ママの可愛い仔羊さん…ほら！

(40) Little Chandler は、恥ずかしさで頬が火照るのを感じ、ランプの光が届かないところへ退いて立った。聞いていると、赤ん坊の嘔り泣きの発作は少しずつおさまってきた。悔悛の涙が彼の目に湧いてきていた。

* *

「小さな雲」は、明確な3部構成を成している。第1部(1)~(10)では、Gallagher に会うまでの Chandler の心に去来する様々の想念が描かれている。第2部の(11)~(28)では、Corless's の中で二人の会話が、第3部の(29)~(40)では、Chandler の自宅での Annie とのやりとり、及び Chandler の想念の叙述が中心になっている。

第1部は、King's Inns の事務机に座ってもうの想いに耽る Chandler の描写で始まるが、読者に強い印象を与えるのは、その容姿——“His hands were white and small, his frame was fragile, his voice was quiet and his manners were refined. He took the greatest care of his fair silken hair and moustache and used perfume discreetly on his handkerchief. The half-moons of his nails were perfect and when he smiled you caught a glimpse of a row of childish white teeth.” (3)——の、effeminate ともいえる華奢さと、どこかで大人に成長することを阻害されたかのような子供っぽさである。ジョイスは、あだ名の“Little Chandler”を最初から最後まで使用していて、“Little”に纏綿する小児めいた印象が強く持続し、Chandler はその中に封じ込められてしまっている。そのために、(9)で自分を憂愁の詩人として世に出す名として Thomas Chandler という full-name が出て来たときも、“Little Chandler”にすでに馴染んでしまった読者にはそれも少し滑稽に響かざるを得ない。

King's Inns での Chandler の仕事は、“his tiresome writing” (3)という記述、あちこちに匂わされている生活のつましさを考え合わせると、the Deeds Registry Office 等で働く文書関係の仕事、特に書写の仕事をしている比較的低い身分の事務員と想定できる。その点で、次の作品“Counterparts”の Farrington と類似した境遇に設定されているが、Farrington が、一字一句間違えることが許されないこの仕事に向かない体質の人間であるのに対し、Chandler の律義さ、真面目さ、小心さはまさにこの職業にうってつけのものとなっている。勤務が終わると、他の事務員たちに対すると同様に、机に対しても“punctiliously”に辞去を行っているような描写(5)、また夜の通りを歩いているときの、“... as he walked boldly forward, the silence that was spread about his footsteps troubled him, the wandering silent figures troubled him; and at times a sound of low fugitive laughter made him tremble like a leaf.” (6)というほとんど戯画的なまでの小心さの描写等がそれを裏付けている。

Chandler には、その小心さ、感じやすさと繋がる、詩的な一面もある。彼は独身時代に詩集を買いたためており、それを妻に読んで聞かせたい誘惑に駆られるが、内気さのためにそれができず、代償として1人で詩を口ずさんで心を慰めているところ(4)、Grattan Bridge で憂愁の詩情に襲われ、それを

表現して詩集を出すことを夢想するところ(8)、家に帰ってから、パイロンの詩集を読み、その憂愁の韻律が部屋に充ちるのを感じているところ(35)などにそれが窺える。

Kings' Inns を出てから Corless's までの行程は、『ダブリン市民』全般について言えることだが、すべて現実に即したものである。Kings' Inns を出たところが Henrietta St. でこれを150mほど南西に行くと Boulton St. に出る。そこを右に折れ、南南西に100m下ると、道は2つに分かれ、左の南南東に向かう Capel St. を取って500mばかり下ると、Liffey 川に懸る Grattan Bridge に出る。それを渡り50mほどさらに進むと、東西に走る Dame St. にぶつかる。この Dame St. を300m少し東に行き、右手の路地を入った先の St Andrew St. に有名なレストラン Corless's はある。Chandler のように足早に歩くと、10分以内で着く道のりである。語り手は、“free indirect speech” という技法を使い、Chandler の意識を濾過してきた言葉を、ある場合にはなぞりながら、ある場合には突き放して語っており、その弁別は困難を極めることが多いが、この部分に関して言えば、Chandler 自身、それらの通りを几帳面に意識しながら歩いているように思われる。(5)~(6)が Henrietta St.、(7)が Boulton St.、(8)が Capel St. と Grattan Bridge、(9)が Dame St. にほぼ対応している。Dame St. の名前はテキストに出てくるわけではないが、「1歩進むごとにロンドンが近づき」という表現は、ほぼ南に走る Capel St. でよりは、東に（つまりロンドンの方向に）走る Dame St. でのほうが相応しい。（実質的には300m強ロンドンに接近するだけであるから、これも一抹の滑稽味を帯びる。）

Henrietta St. は、元来は教会領であった土地が、イギリスの征服によりイギリス王領となり、その後幾人かの手を経て後、1720年代に、ある archbishop が自分の邸宅建設にあわせて敷設した通りである。1790年代に King's Inns がそこに建設され、19世紀にはダブリンでも屈指の上流階級の住む通りとなった。しかし1900年までには通りに並ぶ建物から上流階級の姿は消え、本文に描かれているように、貧乏人たちが借家住まいをする地域へとさびれていったのである。

Boulton St. に入ると、Chandler の思考は Gallaher のことに集中する。Gallaher は8年前、飲酒と借金、それに絡むトラブルが原因でダブリンからロンドンへ落ち延びていったものらしい。しかし、素行上問題があるとはいえ、Gallaher には、一種の才能と大胆不敵なところがあり、それを生かして彼はロンドンの新聞界で成功を納め、こうして故郷に錦を飾ったのである。“Half-time, now, boys” (7)の逸話は、読者にも、窮地にあつて悠揚迫らぬ態度が取れる彼の器量を印象づける。

その Gallaher の追憶に感化されたらしく、Chandler は、Capel St. に入ったあたりで歩調を速め、“For the first time in his life he felt himself superior to the people he passed.” (8)と、周囲に対し虎の威を借りたような優越感を持ち、“For the first time his soul revolted against the dull inelegance of Capel Street.” (8)と、まわりを睥睨するようにさえなっている。そしてそれとともに、自分もダブリンなどに住んでいては一生うだつが上がるらない、Gallaher のように外の世界に打って出なければならないという焦りのようなものに駆られてくる。

Grattan Bridge にさしかかる。川下の方に、貧しい、いじけた家並みが見え、それが Chandler に、そこらにたむろする浮浪者の群れ (“a band of tramps, huddled together along the river-banks, their

old coats covered with dust and soot, stupefied by the panorama of sunset and waiting for the first chill of night to bid them arise, shake themselves and begone.”) を連想させる。この情感は、詩的なものに昇華されていて、Chandler はそれに自ら酔い、詩人としてロンドンに打って出ることを夢想し始める。

Dame Street に入ると、道は文字通り東へ、ロンドンへ近づくので、その夢想は希望の光を Chandler の心にともし (Chandler は語源的に candle につながり、Ignatius Gallaher の Ignatius は ignite を連想させる)、彼は自分の詩人としての資質を検分し始める。そして、自分がイギリスの批評家に、その憂愁のトーンからケルト派の詩人として認められ、“*Mr Chandler has the gift of easy and graceful verse . . . A wistful sadness pervades these poems. . . The Celtic note.*” (9) という褒め言葉をもらうことまで先回りして夢想している。

ここにはジョイスの sarcasm が二重に働いている。1つは、まだ1編の詩も実際に書いたこともないであろうのに、もう賞賛の書評の文句まで夢想する甘さ、もう1つは、「ケルトの憂愁」を素直に受け入れている甘さに対するものである。所謂「ケルト的」として今日にも通用している stereotype は、日本の場合も類似した現象が見られたが、征服者の側から発案されたものであって、19世紀後半から熾ってきた所謂 “Celtic Twilight” の運動に対しジョイスが冷淡で批判的であったのは、そうした事情を彼が見抜いていたからにほかならない。

Corless's に着き、しばし逡巡したのちドアを開けたところから第2部に入る。突然現出した赤や緑の光の乱舞が、効果的に舞台の切り替わりを演出している。『ダブリンの人々』の幾つかの作品同様、「小さな雲」においても「光」は重要な motif になっていて、第1部の “The glow of a late autumn sunset covered the grass plots and walks. It cast a shower of kindly golden dust on the untidy nurses and decrepit old men who drowsed on the benches ; it flickered upon all the moving figures — on the children who ran screaming along the gravel paths and on everyone who passed through the gardens.” (3) という夕光のきらめきと、第2部の、ウィングラスのきらびやかで都会的で人工的な赤と緑のきらめきは、ある意味で、Chandler の住む心象風景と、Gallaher の住む心象風景との対比を表現している。まばゆさに意表をつかれどぎまぎする Chandler は、事務員のくすんだ色の世界に属するのであって、Corless's が表象する世界には異質の人間である。

ここで Chandler は、客たちがみんな彼を見つめているように思い、すばやく左右に視線を(何か重要事でも抱えているように眉を^{しか}顰めながら) 走らせるが、視界が少し晴れてみると、別に誰も彼の方を見てはいはなかったことが判明する。この passage は、先刻の、自分が有名な詩人になった場合のことを空想していた勢いがまだ尾を引いていて、皆が自分に注目しているのではないかという錯覚を導いたと解釈もできようが、Garry M. Leonard が指摘するように、ジョイスが、他人の視線を糧として生きていくという、近代人、特に都市に住む近代的人間の特徴の1つを、Chandler のかなり深部に想定している可能性はかなり高いであろうと思われる。例えば(6)の、Corless's についての記憶の中で、着飾った衣装に身を包んだ若い婦人たちや伊達男たちが、この店に足早に入っているところを、

Chandler は、そちらの方向に顔を向けずに足早に通り過ぎていく。それは、そうした享楽の世界に全く興味がないからではなく、そうしたことに全く興味のない自分を演じ、そして、他人が自分を見ておそらく心に描くであろうイメージを、彼の自己イメージとして受け取り、それを支えにして生きていくと解釈するのである。彼の爪の半月は完璧な曲線を描いているが、それは、他人が見れば惚れ惚れするであろうような完璧さという意味で、Chandler の（はたから見ると滑稽でも）誇らしい自己イメージとなっている。さらに一層微妙な描写になるが、“He emerged from under the feudal arch of the King’s inns, a neat modest figure, and walked swiftly down Henrietta Street.” (5) という、一見語り手の客観描写のように見えるところにも、この他人の視線の意識は忍び込んでいるかもしれない。Chandler は、King’s Inns の古風なアーチの下から、あたりの汚らしい人間とは別人種のような小綺麗な身なりの男が出てくるところを自らの頭の中に意識しながら出てきているようにも読めるのである。

第1部が通りによって幾つかの process の節が出来上がっていたように、第2部は、“rounds” によって自然な区切りができていく。(周知のように、アイルランドでは、割り勘は原則として行われず、交互に酒をおごりあう “rounds” という慣習がある。) 最初に Gallaher が酒をおごり、次に Chandler がそれを返すというサイクルが2度繰り返され、全部で都合4杯のウィスキーを2人は飲んでいる。

最初に2人が会ったときから、Gallaher が完全に会話を dominate していて、Chandler はただ短く答えたり、質問したりしているに留まっている。本文に記載されているだけでも、Gallaher の37の総計1031語の科白(27語/回) に対して、Chandler には25の総計229語の科白(9語/回) が割り当てられているにすぎず、読者は、Gallaher が一方的にまくし立てているという印象を持つ。特に出会った最初の Gallaher の科白が最も長く、読者には、臆した Chandler がか細い声で1言2言答えるのだが、まわりの音に埋もれて Gallaher の耳に届かないという情景が髣髴としてくる。

最初の “round” で、Gallaher は、Chandler が生真面目で、世間を見てないことに対する自分の優越をひけらかし始める。酒の飲み方、ロンドンの新聞記者生活、パリ、Moulin Rouge、Bohemian café——それらの話題を出して、Gallaher は相手を圧倒する。

第2 “round” に入る直前の(19)で、Gallaher の言葉にどこか品のないところが見られるようになっていくことに失望したという、Chandler の心が述べられる。しかし Chandler は、Gallaher がロンドンに住み、新聞記者という仕事をしている都合上それもやむを得ないことだと自分を納得させ、ともかくも、厳しいロンドンの競争世界をこうして生き抜いて成功したのは大したことなのだからと思いついて、再び Gallaher を羨望の眼差しで見上げる。

Gallaher の話は、いよいよ艶いた方面に向かい、そちらの世界にも彼が通曉している様子が吹聴される。Gallaher は調子づき、ウィスキーの飲みっぷりも、Chandler のちびちび舐めるような飲み方と好対照に、一気に呷るように飲んでいる。

第2 “round” と第3 “round” の間に、2人は葉巻を吸う(この作品の題名の “A Little Cloud” の雲は、作品中どこにも出てこないのだが、この場面の葉巻の煙が唯一雲を思わせるものになっている)。

バーテンダーが酒を持ってくるときはいつも二人とも、幕間の俳優のように、自分の考えに沈んでいるらしく描かれているところが注目される。

第3“round”の前半部、さらに話は際どいものになる。ここに至っては、Gallaherの1人舞台で、Chandlerは唯々ウィスキーを舐めながら肝を潰すばかりとなる。それが一段落すると、話はChandlerのことに移る。去年の5月に結婚し、子供が誕生し、それが男の子であったことを、嬉しそうに含羞みながら話すChandlerの様子が印象的で、Gallaherはそれを祝福する。気持ち良くなったChandlerは、Gallaherを家に招待するのだが、Gallaherは何かと支障を申し立ててそれを断る。

第4“round”に入る直前、再びChandlerの心中が描かれる。Chandlerは、すでに大分酔ってきているようだが、Gallaherが招待を断ったことに、Gallaherの友情が表面的なものにすぎないこと、Chandlerに恩着せがましくつき合っているのに過ぎないことを見抜く。悪く考えれば、別の若い男とカード・パーティに行くまでの時間潰しに、彼に自分の自慢話をしているだけなのかもしれない。このようにGallaherに対する一種の嫉妬が、彼の誇りを刺激し、自分の小心さを克服し、男らしさを見せつけたい欲求へと駆り立てていく。

第4“round”は、Chandlerが“boldly”にグラスを取り上げることによって始まる。“Who knows?”というChandlerの言葉は、先刻Gallaherが使ったもので、それを意趣返しのように使いながら、初めてChandlerのほうがupper-handを取ろうとする。ChandlerのGallaherに対する優越は、彼が結婚し子供を持っているのに対し、Gallaherはまだそれができずにいるというところに根拠を置いている。しかし、当然ながらGallaherは、自分がinferiorな立場に立たされることを肯ぜず、むしろ結婚することを男性の自由を失う愚行（「袋に頭を突っ込むこと」）として、相手よりも高い位置に立ち続けようとする。しかし、反論すればすぐに潰れてしまうであろうと思われたChandlerは、案に相違して落ち着き払い、相手がまだ結婚について何1つ知らない子供ででもあるかのように、“Some day you will.”と平静に言う。“You think so?”と言ったGallaherは、やや意表をつかれたかのように見える。追い打ちをかけるようにChandlerは、“You’ll put your head in the sack, like everyone else if you can find the girl.”と、Gallaherを劣者扱いしながら、預言者のように言い放つ。ここでGallaherのオレンジ色のネクタイと青みがかったスレート色の目がまともにChandlerの方に向いたことは、彼がむきになったことを暗示している。（ということは、それまではChandlerをまるで子供扱いしていた証左になる。）そして、自分は恋だの何だの（お前がやりそうな）子供じみたまねなどには最初から洩もひっかけていない、仮に結婚するとしても、金を持っていない女は相手にしないと、自分の優位をほのめかす。

しかしChandlerは、Gallaherの言葉を見透かしているとでもいわんばかりに、糞落ち着きに落ちて黙って首を横に振ってみせるではないか。ここに至ってGallaherは完全に激昂し（“vehemently”）、お前が知らないだけだが、俺は結婚など、しようと思えばいつでも誰とでもできるのほど女に取り囲まれて生活しているんだ、ただ独身時代の享楽を存分に味わうまで、1人の女に縛りつけられるような愚かなことをする気がまったくないけどと、やや纏れながらもまくし立てる。それから体勢

を立て直し、おもむろに、どんな女も結婚すればいつかは“stale”になるからなと、全ての結婚の普遍的な弱点を突いて Chandler に止を刺す。

ここでぶつりと第2部は途切れ、場面は Chandler の家の玄関脇の彼の小部屋に移り、椅子に座って子供を抱いている Chandler が登場する。そして Chandler が帰宅してから、今の状況になるまでの経過が語られる。「光」が、第1部と第2部の巧妙な対比を演出していたように、ここから始まる第3部の舞台を照す、白い磁器製のシェードを持つ小さなランプの「光」は、「家庭生活」を表徴し、やはり第2部との際立ったコントラストを醸し出している。その光に浮かび上がっているのが、彼の妻 Annie の写真で、彼のアルコールの影響を受けた目はそれを見つめながら、彼女について考え始める。最初に、彼女が着ている青いブラウスが、Chandler が、恥ずかしさをこらえながらそれを Annie に買って帰り、喜んだ Annie は彼にキスをしたが、値段を聞くと返品すると言い、しかし服を着てみると気に入って手放せなくなり、再び彼にキスをしたという追憶を甦えらせる。それから Chandler は、Annie の目を冷ややかに見つめ、そこに何か卑しいものがあることを嗅ぎつける。そして、Gallaher の話に出てきた、“passion”と“rapture”と“voluptuous longing”にうるんだ目を想い、Annie の情熱のない取り澄ました目を厭うようになる。そうなるとう度は家具を見ても、同じような貧相さが鼻につき、Chandler には今の生活全体がたまらなく思えてくる。この家から永久に逃れられない運命なのか？ロンドンに打って出るようなことは終生できないのか？詩を書く夢が再び彼を襲う。彼はテーブルの上にあったバイロンの詩集を開き、最初の詩を読み始めるが、第2スタンザの最初まで読んだところで、赤ん坊が泣きだし、なだめても揺すってもいっそう激しく泣く始末。このような生活に囚われて一生を過ごさなければならぬ運命かと、Chandler は、ついには絶望的な発作に駆られ、赤ん坊を怒鳴りつける。赤ん坊は、当然ながら驚愕し、痙攣的に泣きわめき始める。そこへ Annie が帰ってきて、Chandler は弁解しようとするが、彼女は耳を藉さず、赤ん坊をあやし始める。泣き声が鎮まっていくなを耳にしながらか Chandler は自分が恥ずかしくなり、悔悛の涙を目に滲ませる。

さえない事務員生活を送っていた Chandler は、ロンドンで成功して帰ってきた Gallaher によって刺激され、自分も一旗揚げたいと夢想するが、結局 Gallaher にさんざんいばられ牛耳られ、嫉妬心から一矢を報いようと反抗を試みてみたものの、それも言い負かされ、すくすく帰ってきた自分の家でも、妻にそっけなくされ、赤ん坊をあやすことすら出来ず、自分を情けなく想いながらも、結局ダブリンに縛りつけられたままの生活に戻るといふ「自然主義的」筋立てである。

* * *

しかし Gallaher は、本当にロンドンで成功しているのだろうか？Gallaher の言葉は読者に彼の成功を疑わしめるところを持っている。パリに精通しているような口吻だが、噂通り美しい街なのかという Chandler の問に、“Beautiful?... It’s not so beautiful, you know. Of course, it’s beautiful...”と、撞着したことをあわてて言っている。Moulin Rouge はよいとしても、全ての Bohemian café に行ったことがあるというのはどう考えても眉唾ものだし、ヨーロッパの首都、修道院の頹廃、公爵夫人の性的素乱という話題は誰でも知っている通俗小説的なものだし、“Talk of immorality! I’ve

heard of cases—what am I saying?—I’ve known them: cases of... immorality...” (22)という言い方を見ても、伝聞を受け売りしているに過ぎない印象が否めない。“Some things he could not vouch for (his friends had told him), but of others he had had personal experience” (23)というのも安っぽい修辞技巧に思われる。特に自分を取り巻くという女性たちについて、“I’ve only to say the word and tomorrow I can have the woman and the cash. You don’t believe it? Well, I know it. There are hundreds—what am I saying?—thousands of rich Germans and Jews, rotten with money, that’d only be too glad...” (29)と言っているのは、誰の目にも真実とはほど遠い噴飯ものに映るはずである。

Gallaher は、借金地獄から逃げ出すために、見るも哀れな様子で Chandler に見送られて夜逃げしている。また、それまでいつも日曜の朝になると Chandler は自堕落な生活の Gallaher を諷めていたとのこと。そうなるに Gallaher には、何とかして Chandler を見返してやりたいという衝動が働いていて当然である。彼の自慢話の裏にはそうした complex が潜んでいるに違いない。しかしその自慢話も、怪しいものが多く、(23)でどうやら底をついたように見える。そして話が Chandler のことに移り、彼が結婚し、男の子にも恵まれて、堅実な家庭を築いていることを知らされ、それに対し、読者にもさほど誠意が籠ってはいそうにないと見抜けるような祝福を送っている。(事実、直後には、結婚などして辛気臭い思いをすることなど自分はまっぴらと言っているのだから、“And that’s the wish of a sincere friend, an old friend. You know that?” (24)という先ほどの祝福は、何だったのかということになる。)Gallaher が Chandler の言葉にあれほどむきになったということは、Gallaher は、30歳をこえてもまだ結婚できないだけでなく、そのめどさえ立っておらず、淋しい生活を送っているのではないかという猜疑を読者の心中に誘起するのである。最後の“Must get a bit stale, I should think.” (29)という捨て科白めいた言葉も、“Half-time, now, boys.”と同じ種類の「窮余の強がり」に過ぎないようにも思われてくる。

仕立てのいいツイードの上着、葉巻、金時計、Corless’s の店、“garçon” や “François” や “cocottes” や “parole d’honneur” といったフランス語など、裕福さと都会風の小道具をちらつかせるのであるが、Gallaher の言葉は、それらとは裏腹に“vulgar” なものを示唆しているし、ロンドンでの新聞記者の生活そのものが、彼が吹聴するほどのものではないのではないかとさえ思われてくるのである。

Chandler 自身は、Gallaher こうした話を素朴に信じているのだろうか?(27)において、Chandler は、自分は生れにおいても教育においても、Gallaher よりも上である、それなのにこのような境遇の差が生じるのは不公平だという不満を吐露している。そうすると、これまで何度も読者が聞かされてきた Chandler の Gallaher に対する「賛嘆」は、Chandler が本音を隠して自分に言い聞かせていたことに過ぎないことが見えてくる。酒と強い葉巻に逆上させて、Chandler は押し隠していた優越の本音を Gallaher にぶつけ始める。彼は、Gallaher がむきになればなるほど、相手を見透かしたように冷静に否定してみせる。ロンドンの新聞記者という職業にしても、最初は羨望の的のようなことを言っているが、

心の底では“mere tawdry journalism” (27)と見下していたのだ。Chandlerの自己評価は極めて高く、自分の書くであろう詩に対しても、“He could not sway the crowd but he might appeal to a little circle of kindred minds.” (9)と、選ばれた少数に自分を位置づけている。

自意識の過剰と含羞みは強い関連を持っていて、Chandlerの顔面に頻繁に訪れる紅潮は、内に秘めた自意識が刺激された結果のものである。他人の目を意識し、他人の目に映る自分を自分となそうという魂胆は、その小心さにも、含羞みにも、自意識の屈折を与えずにはおかないであろう。彼は無意識に含羞むことも小心であることもできない。含羞むとき、彼は自分の含羞みが相手にどう映じているかを意識し、その結果生じるであろう善良さの印象を以て自分自身にも自分が善良であることを信じさせようとするところがある。さらに言えば、自分のうだつの上がないことを、小心さ、善良さに転嫁してすませているふしまで感じられる。

例えば、夜暗い通りを歩いていて、密やかな笑い声が聞こえると、彼は木の葉のように打ち震えるという。しかしもしそれが本当に不快な経験であるのなら、いくら冒険のまねごととはいっても、自分からそのような場所に足を踏み入れ続けるはずはない。密やかな笑い声は何かの誘惑を暗示しており、彼の小心さは、そのような誘惑から自分が縁遠い人間であるということを自分自身に対して証明する契機として利用されている。

子供っぽい白い3本の歯で下唇を噛めば、それは含羞みの表情となり、自分が真面目で善良な人間であるとの自己証明になる。Corless'sに入る前、彼は逡巡し、ドアを開けるとまぶしい照明に目を眩ませるが、それは、自分がここに来るような享乐的な人間ではないことを、他人の目を借りて、自分自身に証明する擬態になっている。

(31)でのAnnieの青いブラウスを買った時の回想を見てみよう。彼はさんざんどぎまぎし、恥ずかしい思いをしているが、それを思い出すとき彼はそんなに恥ずかしそうではない。どぎまぎすることが、如何に彼が純情にAnnieのことを考えているかを証明してくれるものになっているからだ。

顔を赤くするのも、純情を証明してくれるものであり、特に赤くなったことを恥ずかしく思うことがそれに付け加われば、一層純情の純度が加わる。しかし、“The blush which had risen to his face a few moments before was establishing itself.” (27)となつては、紅顔も厚顔の趣を帯びるのである。

Chandlerが肝を潰せば潰すほど、Gallaherの話は一層の熱を帯び、際どさをエスカレートさせていく。(そしてそれだけ尻尾を出しやすくなっていく。)Chandlerはある意味で、Gallaherとの会話がどのような流れを取るか、先んじて把握しているようにも見える。家に招待してGallaherに断られるが、それも断られることを予め見通した上で招待しているきらいがなくもない。帰宅したChandlerとAnnieの様子を見ると、とてもその晩Gallaherが来ることなど考えられないような雰囲気漂っている。

Chandlerは憂愁の人でもある。しかし彼が憂愁の情に浸っているところを見てみよう。前に引用した夕光の金粉を叙した後――

He watched the scene and thought of life; and (as always happened when he thought of life) he became sad. A gentle melancholy took possession of him. He felt how useless it was to struggle against fortune, this being the burden of wisdom which the ages had bequeathed to him.(3)

Chandler の憂愁は、運命を運命として最初から甘受しているところから生まれている。おそらくここには、Gallaher がロンドンで成功して帰ってきたという知らせが影を落としていると憶測されるが、自分がさえない事務員であっても、それに無理に抗ったところでどうしようもないという諦めの“sadness”の淵源は、思いのほか深いのかもしれない。Chandler はそれが、幾時代にも互って堆積されてきた知恵の“burden”であるとして、憂愁の情は、彼の精神的優越を支えてくれるものになっているが、幾時代にも互って堆積された知恵の重みという言葉には、どうすることもできないイギリスの支配に抵抗して挫折してきた長く辛い歴史の重みも感じられる。Gallaher は、その敵国のロンドンの威光を借りて烏滸づき、オレンジ党を連想させるオレンジ色のネクタイに首を絞められている。成功した Hogan の勤める Land Commission は、Chandler の勤める King's Inns 同様、イギリスの政府機関の 1 つである。Henrietta (> Charles II の妻 Henrietta)、Capel (> Arthur Capel, Earl of Essex) 等、ダブリンの通りを点綴する名はいずれもイギリス人の名前から取られたものだ。通りを丹念に意識しながら歩く Chandler は、Capel St. から Dame St. に左折する部分については何も言及をせず、自分の空想に没頭しながら、ただ足早に歩いていくばかりである。その角に君臨しているのが The Castle で、それがイギリスの支配の牙城であることは言うまでもない。それに言及しないのが、幾時代にも互って堆積されてきた知恵というものであろうか。

Grattan Bridge の上を歩き、川下に並ぶ貧しい家々を眺めながら、Chandler はやはり怒りを燃やすことはせず、諦めの憂愁が彼を捉えるにまかせる。彼はその憂愁を詩に表現し、イギリス人の批評家に褒めてもらうところを空想する。それが世に認められる一番いい方法なのだから。それでも、この橋の上で、彼の心に希望の光がともったことは確かで、そのことと、この橋の名がちなむ人物が、例外的にアイルランド愛国党の指導者 Henry Grattan (1746-1820) である（橋の名は元来は Essex Bridge であった）ことは、恐らく関係があるだろうと思われる。

しかし憂愁の情は、現実に対し観照的なスタンスを取ることによって可能になるものであって、現実と積極的に交渉しようとする姿勢とは結びつきにくいのは否定しがたい。金色の夕光がきらきらと注ぐみすぼらしい老人や薄汚い子供たちを、窓を隔てて憂愁の目で眺めているときは、それらを情趣あるものとして見ることは易しい。しかし、Chandler は、現実には 1 歩外に出て、彼らと間近に触れ合いそうになると、“all that minute vermin-like life” と、厭悪の情を露にして、彼らを避けるように歩いている。

同様の落差は、彼自身の子供についても見られる。Gallaher 相手に話しているときには、自分の子供について、こぼれそうな含羞みで嬉しそうに反応しているのに、現実には彼の赤ん坊を抱いている時には、そうした情愛はどこにも感じられない。むしろ泣き叫ぶ子供は自分の自由を束縛する邪魔な存

在としてすら捉えられている。自意識の糧となった憂愁や含羞は、自己正当化の分だけ、現実の他者には冷ややかな filter にならざるを得ないようである。

(34)~(36)で、Chandler は、彼の唯一の友である憂愁の情を Byron の詩集の助けを借りて再び呼びだそうとする。よく指摘されるように、Byron 詩集の冒頭に置かれたこの “On the Death of a Young Lady, Cousin of the Author, and Very Dear to him” (1802) は、Byron が14歳の時に書いた詩で、衆目の一致するところ、感傷的な凡庸な詩⁽⁷⁾ということになっており、それを32歳の Chandler が、自分もこのように書けるだろうか、と手本にしているところにはジョイスの irony が働いているとするのは妥当な見方かもしれない。詩全体は以下の通りである。

Hushed are the winds and still the evening gloom,	風鎮まれるかそけき夕まぐれ
Not e'en a Zephyr wanders through the grove,	樹立を巡る風 ^{ゼフィロス} 精もなき刻限
Whilst I return to view my Margaret's tomb	我はマーガレットの墓所に戻り来
And scatter flowers on the dust I love.	愛しの骸 ^{むくろ} を覆へる土に花を撒きたり
Within this narrow cell reclines her clay,	か細き棺 ^{ひつぎ} にかの土くれ横たわり給ふ
That clay, where once such animation beam'd:	そはありし日生氣輝きわたりみたりしに
The King of Terrors seized her as his prey;	死神の爪にかかりてかくは変じ果てたり
Not worth, nor beauty, have her life redeem'd	ゆかしき美も命贖うこと能わざりき
Oh! could that King of Terrors pity feel,	あゝ死神に今一片の憐れみの情あらば
Or Heaven reverse the dream decrees of fate!	天こそを夢となし運命 ^{きだめ} の輪を一寸戻させ給はば
Not here the mourner would his grief reveal,	なんぞここに喪者悲嘆にくれてあらんや
Not here the muse her virtues would relate.	なんぞここにかの気高さを語りてあらんや
But wherefore weep? Her matchless spirit soars	しかれども ^な 哭くはそも故ありや?かの魂の
Beyond where splendid shines the orb of day;	日輪の輝ける宮の彼方へと飛立ち
And weeping angels lead her to those bowers	涙の天使つき添ひてかの四阿に向かひ
Where endless pleasures virtue's deeds repay.	すでに永遠 ^{とは} の歓喜に報ひられてあらんには
And shall presumptuous mortals Heaven arraign,	さかしらの我らいかで天を咎め
And, madly, godlike Providence accuse?	狂ひて神意を誅すべきや
Ah! no, far fly from me attempts so vain; —	否、否! かくも増上慢の企て我より遠く去れ
I'll ne'er submission to my God refuse.	我が神は我が主、従ひ服すこと我が務めなり

Yet is remembrance of those virtues dear,	しかはあれかのゆかしき追憶は去らず
Yet fresh the memory of that beauteous face;	しかはあれかの美しき面影は褪せず
Still they call forth my warm affection's tear,	今なほ我が熱き思慕の涙流れてやまず
Still in my heart retain their wonted place.	今なほ我が心かの面影を宿してやまず

Gallaher の「成功」に煽られ、はかない野心の火を燃やし始めた Chandler は、普段は抑えていた矜持の念を、自己防衛の小心さの殻を破って Gallaher にぶつけ、Gallaher は Gallaher で、隠していた劣等感を突かれていきり立ち、持ち前の「才能」で窮地を切り抜け、Chandler を言い負かす形を保ち、相手の弱みに一撃を加えて言葉を巧みに切る。suggestive な Chandler は家に戻り、妻に冷ややかな応対をされ、家に赤ん坊を押し付けられて残されると、妻も子も、さらには結婚生活全体が厭わしく思われて来るが、赤ん坊に泣かれ、戻ってきた妻になじられてみると、これまでの反抗の炎はしゅんと消え、元来の Little Chandler に戻る。その心理の変遷は、運命に一度は逆らおうとするが、結局は運命を宗教的な脈絡で受け入れようとする、上の Byron の詩と一脈通じている。

Chandler は、含羞みの仮面の下に小狡い面を隠し持っているのはこれまで見た通りだが、ある場合にはそれは読者の笑いを誘う種にもなっている。帰宅した Chandler は、Annie の写真を眺めながら、目も顔も綺麗だが、そこには何か卑しいものがあると感じく。読者は直ちに、Chandler が Gallaher に会って少し話をすると、Chandler が Gallaher の言葉遣いにどこか卑しいものがある気がついてがっかりしたという条(19)を思いだす。これはどうやら、Chandler の対人関係における性癖ではないのか。しかし読者はそれには騙されない。Chandler は、卑しい卑しいとって非難するが、実際には Annie の目や顔が綺麗であることを潜在意識下でちゃんと味わい評価している。回想の中で、自分の苦労を分からない素っ気ない女だと形式的には描いて見せるが、Annie がキスをしてくれた部分はやはりまんざらでもない思い出として treasure されていることが分かる。“Hm!...” という Chandler の反応は、表向きは彼の「冷ややかな」視線に呼応した、妻を見下す声として発せられているのであるが、読者はそこにも Chandler の「のろけ」を聞きつけて微笑せざるを得ない。妻の写真が返す「冷ややかな」視線も、Chandler が今晚そう取りたがっているだけの話で、普段はそうでないからこそ、そこに置かれているに違いない。

そもそも Chandler 自身、自分の詩人としての天稟にどれだけ肚の底から掛けてみる気であるのかははっきりしない。Corless's に向かう時には、Gallaher に口をきいてもらう算段を考えているが、その考えはどこへいったのやら、その後まるで閑却されている。Chandler は、事の成り行きを最初から何となく予感して、そのシナリオに従い、最後の悔悛の涙にまで至っているのではないか。

Annie は、ブラウスを見ると気に入るが、値段を聞くと返品すると言い、しかし身に付けてみると返せなくなる。Bewley's の “Oriental Coffee” (Chandler の “Oriental dark eyes” と同じ潜在願望を感じさせる) が手に入らないと、“tea” なしでも構わないと言っているが、角の店の閉店時間が近づくとやっぱり買って来ると思い直している。こうした彼女の思い直しの性癖らしきものに、読者は一種

の愛嬌を感じる。Chandler の口からは冷たい女として描かれるが、実際にはそうではなく、また Chandler もその点は心の底ではよくわかっているように思われる。

題名の「小さな雲」(“A Little Cloud”)は、これまで指摘されてきているように、『聖書』の「列王記上」(I Kings) 18:44の「御覧ください。手のひらほどの小さい雲が海のかなたから上って来ます。」⁽⁶⁾から来ていると思われる。イスラエルの預言者エリヤ (Elijah) は、当時ユダヤ民族がエホバを忘れ崇拜していた異教の神バール神 (Baal) の預言者たちと闘い、勝利を納め、主を忘れた罰として数年来続いていた旱魃が終わることを民衆に告げる。最初は見えなかった雲がやがて遠くの空に、最初は小さく姿を現し、そのうちその雲が大きくなって豊かな雨を乾ききった大地にもたらしてくれるという物語である。ジョイスの「小さな雲」との照応はそれほどはっきりしている訳ではないが、Gallaher の話に出てくる都会の歓楽、さらには Chandler が囚われる詩人の名声は、往時のバール神が施してくれた御利益と近いであろう。では何が Chandler をその Baal 神から引き離してくれたかと考えれば、やはり、彼の小心さ、含羞みだと答えざるを得ない。Chandler の小心さ、含羞みに対する読者の評価は、読みながら逆転していくのだが、最後に来てもう一度、それは微妙な反転を起す。

赤ん坊に Chandler が本能的に叫ぶ “Stop!” という雷のような怒鳴り声は、Chandler 自身のたわけに対する怒鳴り声にもなっている。赤ん坊が泣き叫び泣きじゃくると、Chandler は突然子供が心配になり、胸にひしと押し当てている。最後の場面に現出しているのは「聖家族」の戯画像にほかならない。母親は子供に “Lambabaun”(=lamb-child)、“little lamb of the world” と呼びかけ、父親 (Joseph) はその脇に所在なげに立っている。

Little Chandler は、ランプの光の届かないところに身を退いて立つが、それは恥ずかしさで顔が赤くなったのを見られたくないからである。ここにも、Chandler のぬかりない自己演技を嗅ぎつけようと思えば出来なくもないであろう。しかし、この諦念が、“paralysis” の1つの発現として、宿命적であればあるほど、あわれもそれに付随して深まるのであって、誰に見られるというのでもないのに、部屋の暗がりにも身を寄せて悔悛の涙を浮かべている主人公の姿に、読者は、ほぼ純粋な含羞みを感知し、その雀の涙のような湿り気をも、早天の慈雨の mockery として受納し、これは、“recurrences of faith and resignation and simple joy” (9)が、彼の言葉通りに、もう一度、その小さなサイクルを完了したのであると、認めようという気に誘われるのである。

— 注 —

- (1) Richard Ellmann (ed.), *Letters of James Joyce* Vol. II, The Viking Press, 1966, p.182.
- (2) テキストには、*Dubliners*, Viking Press, 1961を用いた。尚、段落の分け方には、幾つか違ったやり方が考えられるが、本論では便宜上、41段落を設定した。
- (3) Atalanta は、結婚をしたくない (つまり独身の自由を享受したい) と思っている点で、Gallaher と、つまり Baal と関連していると考えられよう。
- (4) “an a.p.” は、appointment と author's proof の略だという2つの説があるが、Gallaher が author's proof を持っているのも不自然だし、休暇に来て仕事は忘れたいと言っているのだから、appointment と考えるのが妥当であろう。

う。

- (5) “stale” は、“Of malt liquor, mead, wine: That has stood long enough to clear; freed from dregs or lees; hence, old and strong” (*O.E.D.*) の意味があるが、obsolete であり、「新鮮さを失った」の意味に取るのが妥当。
- (6) “crumpled”: “Bent spirally, curled. Hence crumpled-horn” (*O.E.D.*)
- (7) ほとんどのバイロン詩集にはバイロン自身の次のような note が付されているという。
“The author claims the indulgence of the reader more for this piece than perhaps any other in the collection; but as it was written at an earlier period than the rest (being composed at the age of fourteen), and his first essay, he preferred submitting it to the indulgence of his friends in its present state, to making either addition or alteration.” (See: John Wyse Jackson and Bernard McGinly, *James Joyce’s Dubliners ; An Illustrated Edition with Annotations*, Sinclair-Stevenson, 1993, p.73)
- (8) 訳文は『聖書；新共同訳』より引用。